



新たに設立された JETAAシンガポール支部、 JETAA東京支部の紹介

(財)自治体国際化協会シンガポール事務所
JETAA 東京

はじめに

1987年から開始されたJETプログラムは今年度で24周年を迎え、2010年4月現在で経験者は5万人を超えています。JETを終了した元JET参加者は、母国や日本以外の国で活躍されている方も、日本にとどまって活躍されている方もいらっしゃいます。元JET参加者は、JETAA (JET Alumni Association) という同窓会組織を作り、日本と諸外国の交流に貢献されています。

今月号では、2009年に設立されたJETAAシンガポール支部と、2010年に発足したJETAA東京支部についてご紹介します。

JETAAシンガポール支部について

シンガポールは、赤道直下の島国で、英語を公用語としています。JETプログラムには、1999年の1名のCIRを皮切りに、近年は毎年20名前後が参加しており、これまでの参加者は合計でALT160名、CIR13名に達しています。

参加者の増加にともない、5年ほど前から、元JET参加者有志が集まり、JETAA支部の設立を検討していましたが、2009年5月に正式にJETAAシンガポール支部が、東南アジア地域初の（そして現在のところ唯一の）支部として発足しました。

今回は、設立総会の様子とその後の活動についてご紹介します。

1. JETAAシンガポール支部設立総会

まず、支部設立準備として、在シンガポール日本国大使館の協力のもと、元JET参加者の連絡先の把握を行い、その結果、総会当日の登録者を含めて45名が会員登録を行いました。

大使館やJETAA国際委員会の協力を得ながら設立の準備が進められ、2009年5月26日に、在シンガポール日本国大使公邸において、JETAAシンガポール支部の設立総会が開かれました。

総会は、山中大使（当時）をはじめ、大使館、シンガポール日本人会等日系機関、シンガポール外務省および現地大学関係者の方々等に多数ご出席をいただいたほか、中曾根外務大臣（当時）、シンガポールのジョージ・ヨー外務大臣、JETAA国際委員会マイケル・アダムス会長（当

JETAAシンガポール支部
ロゴマーク



設立総会における記念撮影



夏祭り

時)から祝辞が寄せられました。

また、当日行われた会員の投票により、JETAAシンガポール支部のロゴマークを決定しました。

2. 鳩山総理(当時)夫人との懇談会

2009年11月にシンガポールで開催されたAPEC出席のために、鳩山総理(当時)夫妻がシンガポールを訪問されました。その際に、鳩山幸夫人からシンガポールの若者と懇談したいとのご希望があり、JETAA会員との懇談会が設けられました。

懇談会は、JETAA会員の日本での経験談や帰国後のJETAAでの活動の様子などの話題で大いに盛り上がり、幸夫人からは、今後も日本とシンガポールの架け橋として活躍を期待している旨の激励のお言葉をいただきました。

3. 「日本人会夏祭り」でのブース出展

昨年、今年とシンガポール日本人会主催の夏祭りに、大使館の協力のもと、JETAAブースを出展しました。この夏祭りは毎年8月に開催されるもので、現地在住の日本人のほか、日本に関心のあるシンガポールの人々が多数訪れます(今年の来場者数は約8,000人)。

今年は、シンガポールの伝統的な遊びやクイズを楽しみながら、JETプログラムや日本について学べる内容になっており、大変好評でした。また、この機会にJETプログラムに関心を持ったシンガポールの人々から、多くの質問が出されました。

この他、来日前オリエンテーションや歓送レセプションで新規JET参加者に日本での経験を伝え

たり、日本人とシンガポール人の有志を募って海岸の清掃活動をしたりしています。

JETAAシンガポール支部はまだ発足して間もない組織ですが、日本とシンガポールの架け橋となるべく意欲的に活動しています。シンガポールは日本と距離的に近く、日本に関心の高い人が多いことから、今後ますますJETAAが活躍できる場が広がると考えられます。CLAIRシンガポール事務所では、大使館や関係機関と協力しながら、今後もJETAAの活動を積極的に支援してまいります。

JETAA東京について

JETAA東京は、2010年3月に発足した日本国内では3つめの支部で、会員数は約60名です。

JETAA東京は、草の根の国際交流の推進というJETプログラムの理念と、将来真に国際化した日本を念頭に置くとともに、元JET参加者と社会双方にとって、「コミュニティ、サービス、キャリア」という3つの柱を通じてさまざまな価値を創造することを目標に設立されました。

JET参加者の多くが任用期間満了後は日本を離れますが、なかには日本にとどまり、「われわれは日本の国際化に協力したい。日本社会をより暮らしやすい場所にしたい」と考える元JET参加者もいます。JETAA東京は、JETとしての自分たちの経験を分かち合い、お互いに助け合い、自分たちの能力を社会に貢献していくべきだと考え、議論する場を求めています。

以下、JETAA東京の活動方針の3つの柱である「コミュニティ、サービス、キャリア」について説明します。

- ① コミュニティ…JETAA東京は、東京在住の元JET参加者のコミュニティの絆を強めるだけでなく、他の組織との協力関係やネットワークの構築を通じて、日本人・外国人の区別なく、

JETAA東京のロゴマーク





セカンドハーベスト・ジャパンとのボランティア活動



「みんなの森」への参加

日本でのより良い国際コミュニティを育成することを大きな目標としています。

② サービス…サービス（行動）は、元JET参加者にも外部の方に対しても、JETAA東京の活動の根幹となっています。組織として、国際的・地域的に価値のある事柄を支援することでより良い社会づくりに貢献できるよう努力したいと考えています。そうすることで、われわれはメンバーの絆を強めるだけでなく、忙しい都会生活のもとで忘れられがちな、「行動することの意味」を実感してほしいと望んでいます。

③ キャリア…東京への移住を検討していたり、東京在住の元JET参加者にとって、キャリア（就職・転職等）の問題は一番の優先事項です。やりがいのある仕事は、その社会で暮らしていく上で重要な部分を占めますが、就職活動には応々にして困難を伴います。JETAA東京は、つねに、東京でのより良いキャリア形成の機会を求めている元JET参加者へ有益な情報を提供し、幅広くサポートしていく役割を将来的に担っていきたいと考えています。

JETAA東京は産声をあげたばかりの若い組織ですが、役員たちは、民主的で、かつ活発な組織を作るために一生懸命努力しています。加えて、すべてのユーザーが自分のコンテンツを投稿して協力できるようなウェブサイトの構築を進めているところです。その結果、わずか数カ月の間に会員数は確実に増加し、在日アメリカ商工会議所、セカンドハーベスト・ジャパン（食品会社などから提供を受けた食品を、支援を必要とする人々に

運び有効に使ってもらう活動を行うNPO）と「みんなの森」のような他の組織と協力しながらイベントや慈善活動に参加し、成功を収めてきました。

この他、「メンタープログラム」（メンター：助言者）を今秋から開始する予定です。このプログラムは、東京に初めて来る元JET参加者に対して、東京生活の先輩がメンターとしての役割を担うシステムです。メンターは半年間マンツーマンでアドバイスをを行い、東京での就職や生活全般にわたって支援を行います。「メンタープログラム」が、東京での就職活動にあたっての手助けとなり、JETAA東京にとってはサービスを育む土壌になってほしいと望んでいます。

JETAA東京は、「元JET参加者」と「東京」との双方にとって価値を創造するために外部と連携し、末永く発展していくことを目指しています。コミュニティ、サービス、キャリアという3つの柱を通して草の根の国際交流の機会を作り、われわれが今住んでいる日本の国際化を進展させるように働きかけることで、JETプログラムの元となる目標を達成していきたいと思っています。

おわりに

「草の根の国際交流活動」というJETプログラムの主旨は、地方団体での活動を終えた後も続いていくことが期待されています。今度新たに設立されたJETAAシンガポール支部、JETAA東京支部についても、今後の幅広い活躍を願ってやみません。



きもののたび

福島県生活環境部国際課国際交流員

Jessica Harvey

ジェシカ・ハーヴィ

2007年、福島県で国際交流員の仕事を始めて、数週間しかたっていない、ある土曜日の朝、寝坊しているところに、国際交流協会で勤務している友だちからただならぬ電話が入ってきました。眠くて、出ないところでした。「きものの先生がもうすぐ尋ねて来るから、今すぐこっちにおいでよ!」と言われました。この先生は、大会に出場させるために、外国人を探し、着付けを教えたがっていたそうです。「大会」の単語で尻込みしましたが、最終的に説得されました。何といっても、会いに行くだけでは痛い目に遭わないでしょう?

協会に着いたら、上品なおばあさんを紹介され、去年の大会のビデオを見せられました。期待に満ちた目で見つめられ、「私が持っているピンクの着物が似合いそうだわ」と言われ、もう断れませんでした。抗議のまなざしを「友だち」に放ちな

がら、協会を出て、だまされたことに、ブツブツ文句をいいました。

このことがきっかけで、東北大会から2008年の東京、NHKホールでの世界大会に出場することになるとは思ってもみませんでした。そして、もちろん、世界大会で優勝するなんて、そんな大それたことになるとは夢にも思っていませんでした。外国人の部の一等賞は、ニュージーランドからのジェシカ・ハーヴィと審査員が発表した時、直後の反応は、「えっ! 他のニュージーランド人がいるの?!」。自分のことと気づくまで、少し時間がかかりました。先生は最高に満足していました。私は頭の中が真っ白になりました。

福島県に帰ってきてから、写真をとられ、インタビューされ、ニュースにのせられ、3つ以上の違う新聞に載り、知事表敬もありました。まるで、セレブみたいでした! もちろん、家族の誰

も、この大きなニュースを信じられませんでした。これまで、勝ったことは、8歳の時の新聞絵塗りコンテスト3位しかなかったのに、今は、家族の一員に、「世界チャンピオン」がいるのです。

その後、数カ月間たってから、父が私と夫を訪ねて来ました。コ



きもの装いコンテスト世界大会、授賞式 (2008年)



きもの装いコンテスト世界大会、トロフィーと (2008年)

ーヒーを飲みながら近況を聞いていると、同僚の一人から、急に電話が入ってきました。私を探しているニュース・アナウンサーがオフィスにいるとのことでした。結局のところ、自分のきもの話をニュースで取材した人で、ニュースの家族の部分で私についてもう一つのストーリーをやりたがっていたそうです。父と夫と私は、数日間、カメラ班に追いかけられ、私たちの一挙一動が撮影されました。数週間がたってから、ストーリーがニュースで放送されました。父とのうれしい再会のこと、旅行や、泣きながらの別れが映されました。家族や友だちの中では大笑いだったそうです。

また数カ月間がたち、写真専門家がオフィスに訪ねて来ました。ニュースを見て、授業で、私をモデルとして使いたがっているそうです。結局、彼の生徒たち20人以上と、2つの素敵なきものモデルとして、一日を過ごしました。大好きな思い出です。

きものお陰で、仕事での絶好の機会にも恵まれました。2008年、野口英世アフリカ賞の夕食歓迎会でMCの仕事をお願いされました。もちろんきものです。受賞者と一緒に、舞台上、アフリカ系の舞いを踊りました。今でも、その時の興奮を思い出すと、笑顔になります。2009年、福島県観光交流局にお願いされ、東京で50カ国の大使館の職員と大使たちに福島県のPR講座を発表しました。着て行ったのは？ 当たり前！ きものです！ そのイベントで福島のブースが一番人気でした。同じ年のうちに、駐日大使福島県訪問イベントでMCの仕事をお願いされ、そのときオーストリア大使がきものに感動され、オーストリア大使館が行っていたファッション・ショーに誘って下さいました。貴重な経験で、とても楽しかったです。また、ニュージーランドのキー総理大臣が参加するイベントを知り、数週間後、東京でキー総理と会うことができました。もちろん、一番素敵な秋用のきものです。少しおしゃべりしてから、実際に会えた証拠を残すように一緒に写真を撮りました。

JETでの経験は驚くべきものです。出前講座をやっていると背中に登ってくる子供たち、真冬に



ニュージーランドのキー総理大臣と（2009年）

みこしを持って海にザブザブと入ったこと、とてもいかれているJET参加者と一緒に、下着だけで雪山を降りて来る夫を見たこと、日の出を見るために富士山を登ったこと、素敵な友だちをたくさん作ったこと、ニュージーランド交流事業を行ったことが、特別な思い出です。

でも、自分の心に焼きついて離れないことを一つだけ選べといわれたら、やはり、2007年の寝不足の土曜日の朝に、電話に出た時のことです。ちょっとした、予想もつかない出来事が、生まれて初めての最高の旅に私をつれていきました。そして、旅はまだまだです！

JET参加者へのアドバイスですか？ 人生においてあらゆる機会をすべて利用することです。どこまでつれていかれるか、可能性は無限ですから！



ニュージーランド、タウランガ出身。ワイカト大学で日本語と言語学を専攻して、半年間、宮崎公立大学に交換留学をしました。2007年にJETプログラムで来日し、3年間福島県国際課で国際交流員として勤めてきました。家族は夫で、第一子の出産予定日は2010年11月です。趣味は料理やケーキを作ること、映画鑑賞、絵を描くことや小説を読むことで、そして、もちろんきもの着付けです！

Jessica Harvey



迷った道が私の道

大分県企画振興部政策企画課国際政策室国際交流員

Melissa Mayer

メリッサ・メイヤー

「近道は、遠回り。急ぐほど足をとられる。始まりと終わりを直線で結べない道が、この世にあります。迷った道が私の道です」という言葉が大分むぎ焼酎のCMで語られます。このCMを見るたびに、この言葉を聞くたびに感動し、大分県の魅力を確認しながら、大分に辿り着くまで「私の道」を思い出します。

日本の伝統文化や日本人の自然に対しての思いが素晴らしく描かれている「さゆり（ある芸者の回想）」という本を高校時代に読んで、初めて日本の文化の特色と日本と自然の親和性を味わって日本に憧れました。その頃、私はファッション・デザインの大学に進学する道を歩んでいました。大学でとても厳しいファッション・デザイン課程の1年目を終えたところ、カリブ海に行く機会がありました。

カリブ諸島を3週間旅行している時、突然人生の岐路に立つことになりました。ファッションの世界ではデザインやスタイルなど表面的な美しさが重要視されていますが、一方、発展途上国の世界では身近な家族や自然が大切にされています。カリブの人たちのシンプルな生活や幸福感を目の当たりにしたら、自分の価値観が完全に変わってしまいました。そして、ファッションではなくて、いろいろな民族の文化や暮らし方を勉強したくなりました。すでに日本に興味を持っていましたから、日本語も学びたいくなりました。

旅行から帰った後、直ちにファッション大学を本当に辞めて、文化人類学と日本語の勉強ができ

る大学に転学しました。1年間日本語の勉強を終えたら、私の「迷っている道」の次の停留所が見えてきました。それは日本に行くことでした。「日本に行くぞ!」と決心しました。それを実現するのに3年間をかけて大学で日本語を勉強しつづけました。そして、交換留学生としていよいよ日本に初めてやってきました。東京で1年間留学をして、2年間で英語の先生として働いて、その後国際交流員の仕事に応募しました。

国際交流員の配属希望地を申請する時に、東京とまったく違うところに行き、日本の違う道を歩むことによって日本の違う一面を経験ができると思いはじめました。ちょうどその頃、宮崎県知事の東国原さんが積極的に宮崎のPRをしていて、いろいろなバラエティショーに出演したり、コンビニで宮崎の特産品が販売されたりしていました。違う地域に行ってみたい、ビーチの近くに住



大分県女子太鼓グループ「豊後くれない太鼓」



湯布院で大分県の観光地を楽しむ

んでみたいと思っていた私にとって、この宮崎宣伝は希望地に「宮崎」を選択するべきという神からの啓示だと思いました。

面接試験の結果通知がやっと届いたら、希望地に当たらずといえども遠からず、宮崎県の隣にある聞いたこと

のない「大分県」に配属されました。「オオイタ」に引っ越すということを周りの日本人に報告したら、大半はあまり大分を知らない様子でした。日本人からヒントをもらえるかと思ったら、みんなさん大分と聞いても「無表情」。反応がとても気になりました。しかも、ネットで調べようとしても情報が限られていました。それで行ってみるしかないと感じました。

国東半島にある大分空港に到着し、バスに乗ると山道をぐるぐる回って、しばらくしたら観光地として知られている別府市を通りました。別府市と大分市を繋ぐ道は別府湾と高崎山の間に挟まれていて、その道を走りながら大分の山と海の美しい景色を同時に見られて、とてもきれいなところに配属されたとはほっとしました。

着任してまもなく、大分チェコ友好協会の招待で駐日チェコ共和国大使が来県し、大使と日田市長の面談で通訳し、日田市のサッポロビール工場や日田祇園山鉾会館に大使をアテンドしました。その2カ月後、大分アジア彫刻展が大分の朝地町で開催され、マレーシアとフィリピンからいらした彫刻家や美術館長の通訳者を務めました。

このような通訳の仕事の他に、大分県に関する翻訳の仕事があります。大分県は乾しいたけ生産量日本一で、乾しいたけを海外に輸出するための翻訳もあれば、大分県の観光地を海外旅行者にPRするための翻訳もあります。また、大分県は人口に占める留学生の割合が日本で一番多い県で、留学生をはじめ、大分県在住外国人の生活支援のため、8ページの英語情報誌「THE TOMBO」

を制作し、隔月に発行しています。さらにカウンセリング担当者として、大分県に住んでいる88人のJETプログラム参加者の相談やサポート情報提供などをしています。

通訳と翻訳の仕事から情報発信やカウンセリングの仕事まで、さまざまな分野で豊富な仕事経験ができています。仕事経験だけではなくて、東京ではできなかった体験が大分県でたくさんできています。日本の文化を楽しむため篠笛と太鼓を習い、大分の自然を楽しむために温泉・カヤック・ハイキング・サイクリングを満喫しています。

このように、いろいろなことを少しずつやってみて、新しい道を開拓してきました。今の自分に辿り着くのに、道を迷いながら、新しい経



大分県の名人福原百桂先生から篠笛を学ぶ

験や体験に挑戦してきました。道に迷えば迷うほど新しい発見があると思います。そして、大分県で仕事と生活をすればするほど大分県の自然、名所、特産物、文化など、さまざまな魅力についてたくさん発見してきました。

このようなことから、国際交流員は日本の道を歩きながら発見したことを海外に発信することで、日本と海外の本当の架け橋を築くことができると思います。



Melissa Mayer

アメリカ・フィラデルフィア市出身。アリゾナ大学文化人類学専攻・日本語副専攻。2005年9月に来日し、上智大学に留学。2006年10月からベルリッツ・ジャパンで英語教授、2008年7月から大分県の国際交流員として着任。趣味：太鼓・篠笛・ハイキング・カヤック・旅行

The Kimono Journey

In 2007, barely a few weeks into my new job as a CIR in Fukushima, I was having a sleep in on Saturday morning when I got a frantic phone call from a friend who worked at the International Association. I was so sleepy I almost didn't answer it. He announced that I should proceed there immediately as there was a kimono teacher planning to call in. This teacher was after some foreigners to teach kimono to in order to put them in a competition. I balked at the word competition but was eventually talked into at least coming to see her – after all just going to meet her couldn't hurt, right?

I arrived at the association to see a kind looking little old lady, who showed me a video of the previous year's competition, and looked me up and down expectantly, mentioning that I would suit the pink kimono she had brought with her. I simply couldn't refuse. Shooting my 'friend' a mutinous look as I left the association, I grumbled to myself about being roped into this kimono thing

I could never have guessed that this experience would lead me through the Tohoku Regional Finals, right up to the World Championship Kimono Contest in NHK Hall, Tokyo in 2008. Nor did I ever, in my wildest dreams, imagine that I could win it.

So when the judges announced someone called Jessica Harvey from New Zealand had won first place in the foreigners' division, my first reaction was "What?! There's another New Zealander here?!" It took a moment to realize they were talking about me! My teacher couldn't have been prouder. I couldn't have been more stunned.

After arriving back in Fukushima, I was photographed, interviewed, put on the news, displayed in no less than 3 different newspapers, and even got a private audience with the Governor. I felt like a celebrity! My family back home, of course, couldn't believe the commotion I had caused. The only thing I had ever won in my life was 3rd place in a colouring contest when I was 8 – and now they had a 'world champion' in the family.

A few months later, my father visited my husband and I in Japan. During our catch up over coffee, I received a phone call from one of my co-workers who claimed that a TV newsreader was in the office looking for me. As it turned out, he had covered my kimono story on TV and wanted to do another piece about me for the family section of the news. We were followed around for a number of days by a camera crew, who filmed our every

My Path is the Wandered Path

In a commercial for Oita barley *shochu* there is a poetic verse that roughly translates as "Take the long way to a nearby destination. In this world there are paths that don't connect directly from beginning to end. My path is the wandered path." Every time I see this advertisement I feel Oita's allure and am reminded of the path I wandered to get here.

The picture of Japan painted in the novel "Memoirs of a Geisha", which I read in high school, gave me my first taste of Japan's traditional culture and the Japanese affinity towards nature, and I was enchanted. At that time, I was on the path to university to study fashion design. After a rigorous first year in the fashion design program, I took off to the Caribbean islands for summer break.

I spent three weeks backpacking in the Caribbean which brought me to a crossroad in my life. Where in the fashion world surface beauty and appearances are valued, in the developing world, things closer to home, like family and nature, are treasured. Seeing the simple way of living and the happiness of the Caribbean people changed my whole value system. I became inspired to learn more about the differing cultures and lifestyles of different people.

As soon as I returned to America, I dropped out of fashion

school and entered a college where I could study Anthropology and Japanese. After studying Japanese for a year, the next stop on my wandering path became clear. Japan was calling my name! However, I spent three years continuing my Japanese studies before making life in Japan a reality. I finally came to Japan for the first time as an international exchange student. I spent one year in Tokyo as an exchange student, and then two as an English teacher, before applying for the Coordinator for International Relations position.

In choosing a placement location, I began to think that going somewhere completely different from Tokyo, wandering down a different road in Japan, would enable me to further experience a different side of Japan. At that exact time, the governor of Miyazaki Prefecture, was actively working to promote Miyazaki by appearing on various television programs, and Miyazaki products were part of sales campaigns at convenience stores throughout Tokyo. As I was compelled to go to a new region, and also wanted to live near the coast, I read this Miyazaki advertising campaign as a message that I was meant to choose Miyazaki as my desired destination.

When the interview results finally arrived, I was placed in Oita Prefecture, which is next to Miyazaki Prefecture. Considering I had never heard of Oita, I expected the Japanese

Jessica Harvey

move. A few weeks later the piece aired on the news, showing my happy reunion with dad, our trips around town, and our tearful farewell. It definitely gave my friends and family a good laugh!

A few months after this a photography teacher called into the office. He had seen the piece about me in the news, and was interested in having me as a model for one of his lessons. I ended up spending the day with over 20 of his students, modeling in a couple of my finest kimonos! It remains one of my favourite memories.

Kimono has also brought me a number of exciting opportunities through work. I was asked to be MC for the welcome dinner at the Hideyo Noguchi Africa Prize Awards in Fukushima in 2008, dressed in kimono of course. I ended up dancing an African jig on stage with one of the prizewinners, and even now, the resulting merriment it caused always brings a smile to my face. In 2009 the tourism board of Fukushima asked me to go to Tokyo to present a lecture to ambassadors and staff from over 50 embassies, dressed in – you guessed it – kimono! Our Fukushima booth was one of the most popular at the event! Later that year I was asked to MC at the Ambassadors' Study

tour to Fukushima, and the ambassador from Austria, impressed by my kimono, invited me to a fashion show that her embassy was preparing. I thoroughly enjoyed the experience, and during the trip I learned of another event which the New Zealand Prime Minister would be attending – I ended up meeting him in Tokyo a few weeks later – dressed in my finest autumn kimono, of course! We had a brief chat before I took a photo of us for proof I was actually there!

My experience through JET has been nothing short of amazing – the kids climbing up my back during presentations, splashing through the ocean in mid-winter with a mikoshi on my shoulders, watching my husband ski down a mountain in his underwear with a bunch of crazy JETs, climbing Mt Fuji to watch the sunrise, making a tonne of awesome friends, and organising the New Zealand Exchange Programme are some of my most special memories. But if I had to choose one thing that sticks in my mind the most, it is picking up the phone on a sleepy Saturday morning in 2007. This simple act led me on one of the wildest rides of my life – and the journey is still not over yet! My advice to JETs? Take every opportunity you are presented with, the possibilities of where you could wind up are endless!

英語

Melissa Mayer

people around me to give me hints about my future destination. I was disappointed by their expressionless reactions when most of them didn't know of Oita either. The limited information on the internet also didn't prove helpful. I had to just go and see for myself.

The airplane landed at Oita airport in the Kunisaki Peninsula, and the bus drove winding mountain roads, before proceeding to pass through Beppu City. On the road that cuts through Beppu Bay and Takasaki Mountain, one can get a panoramic view of Oita's stunning mountain and ocean landscape in one glance. I breathed a sign of relief at being placed in such a beautiful area.

Soon after arriving in Oita, the Oita-Czech Friendship Association invited the Czech ambassador to Oita, and I interpreted between the ambassador and the Hita City mayor, and also accompanied the ambassador on tours of Hita City's Sapporo Beer Brewery and Hita's Gion Festival Museum. Two months after the ambassador's visit, I acted as an interpreter for artists and museum curators from the Philippines and Malaysia, at the Oita Asian Sculpture Exhibition.

In addition to interpretation work, I also do translation work ranging from tourism promotion to shiitake mushroom exportation, with Oita Prefecture having the highest production

of dried shiitake mushrooms in all of Japan. Oita also has the highest number of international students relative to population throughout Japan, and I help support these students and other international residents through a bi-monthly 8-page English newsletter called "THE TOMBO". Additionally, as the JET Program Prefectural Advisor for Oita Prefecture, I help support all 88 JET Program participants through counseling and providing information. With work varying from interpretation and translation, to information distribution and counseling, I am gaining extensive work experience.

I am not only able to enjoy great work experience, but living in Oita provides opportunities that weren't available in Tokyo. I experience Japanese culture through bamboo flute (*shinobue*) and traditional drum (*taiko*) lessons, and I revel in Oita's nature through hot springs, kayaking, hiking and cycling. In this way, I am able to forge new paths by trying my hand at many different things. Wandering the path to my current destination, I have realized that the more one wanders, the more opportunities there are for new discoveries. As I have become very familiar with the land, attractions, products and culture of Oita, through working and living here, I have discovered Oita's hidden appeal. I think that CIRs can really act as a bridge between Japan and the world by sharing the discoveries found along our paths in Japan.

英語